

議論の場における「他者発言容認の前置き表現」使用の縦断的变化 — 中国人日本語学習者の場合 —

**Longitudinal change of the conditional phrase for acceptance of others' opinions
in discussions: The case of Chinese learners of Japanese**

柳田 直美

要旨

日本語学習者に対して議論の場における前置き表現の効果的な指導を行うためには、教授項目の選定とともに、提示された前置き表現を学習者がどのように使用し、その使用がどのように変化していくかについて、実際の発話データをもとに明らかにする必要がある。そこで、中国人日本語学習者対象の「討論会」をデータとし、議論の場において他者に反対意見を述べる際に共感・理解を表す形で配慮を示し、相手発話との関連を明示的に示す「他者発言容認の前置き表現」について、学習者の使用実態の変化を分析した。その結果、前置き表現が単純な指示詞を用いたものから、相手の発話を具体的に取り込むものに変化する一方、複合形を作りにくい形式の選択を避け、「確かに」のような母語の影響が考えられる表現形式に使用が偏る傾向が明らかになった。

キーワード：議論、前置き表現、中国人日本語学習者、相手発話焦点化、母語の影響

1. はじめに

日本語母語話者は議論の場において意見を述べる際、前置き表現を用いて意見をオブラートに包んで提示する(大塚 1999)とされている。このような前置き表現は「本題に入る前に現われ、コミュニケーションを円滑に進めるためのストラテジー」(大塚 1999)であり、メイナード(2005)も指摘しているように、後続する言語行為を意識していること、しかも、それが相手に不都合かもしれないと認識していることを知らせることから、相手に対する配慮を伝える表現である。つまり、前置き表現は対人的な配慮を明示的に示すものであり、反論することによって相手に不快感を与える可能性の高い議論の場においても、その影響を緩和するために使用されていると考えられる。

日本語教育において、討論活動は中級以上の学習者対象の活動として多く取り入れられている。しかし、学習者の発言を観察していると、母語話者の場合と比べて意見の対立が激しく、きつい印象を受けることがある。これには、相手への配慮を示す前置き表現の使用が母語話者の使用実態と異なることが影響しているのではないだろうか。

では、日本語教育において、前置き表現はどのように扱われているのだろうか。メイナード(2005)は、話し言葉における前置き表現は丁寧さにかかわるものであり、学習者に使

用を促すべきであるとしている。また、教師向けの会話の教授法のテキストには、ディスカッションにおける前置き表現について、次のような記述がある。

ディスカッションを分析すると、話の流れを作ったり、発言の順番を取るなどの談話能力、相手に効果的に意見を伝える社会言語能力、うまく理解できなかったときに聞き返したり、発言の調整を求めたりするといったストラテジー能力が必要なことがよくわかります。

—— (中略) ——

ディスカッション例の⑦は「とてもいいと思いますが」のような前置きを言ってから反対しています。

- ① このような表現には、どのような役割があるでしょうか。
- ② 同じような役割を果たす表現には、他にどのようなものがあるでしょうか。身近な教材や、日本語でのディスカッションを実際に観察してみましょう。

『国際交流基金日本語教授法シリーズ第6巻「話すことを教える」』p.56

ここでは、前置き表現、特に相手の発言を容認する前置き表現が、効果的に意見を伝えるために使われているとし、日本語学習者に対しても「社会言語能力」としての前置き表現を身につける必要性が指摘されている。

学習者に対して議論の場におけるこのような前置き表現の効果的な指導を行うためには、取り上げるべき教授項目の選定を行う必要があることは言うまでもない。しかし同時に、提示された前置き表現を学習者がどのように使用し、その使用がどのように変化していくかについて、実際の発話データをもとに明らかにすることも必要ではないだろうか。

そこで本研究は、中国人日本語学習者対象の会話授業において継続して行った「討論会」をデータとし、議論の場において相手に効果的に意見を伝えるための前置き表現を分析する。特に、「とてもいいと思いますが」、「確かに～ですが」などのように、他者に反対意見を述べる際に共感・理解を表す形で相手に配慮を示し、相手発話との関連を明示的に示す前置き表現を「他者発言容認の前置き表現」とし、学習者の使用実態の変化を調査、分析する。

2. 先行研究と本研究の立場

2.1 議論の場における母語話者の前置き表現に関する研究

西條(1999)は、母語話者が使用するメタ言語の機能を表1のように分類し、①から④を「表現の内容とその伝達の過程の調整に配慮したメタ言語表現」(杉戸・塚田 1991)、⑤から⑦を「人間関係の調整に配慮したメタ言語」(杉戸・塚田 1991)に対応させている。そして、最も一般的な討論場面においては、これらの機能は顕著な偏りなく使われること、ディベートやテレビ討論など特殊な場面と異なり、③総括と⑤補正の使用が多いことも特徴としてあげている。また、討論場面において母語話者はメタ言語を使うことにより、(1) 談話の枠組みをつくる(⑦宣言、①話題の提示、④サブポイント提示、総括)、(2) 自分の話したことの何が何と結びつかという意味の結束性を明示する(③総括)、(3) 他者

議論の場における「他者発言容認の前置き表現」使用の縦断的变化
 — 中国人日本語学習者の場合 —

発言を自分の談話に取り入れる(②焦点化)、(4) 自分の作った枠組みを緩和する(⑤補正)、
 (5) 対人関係の配慮を示す(⑤補正、⑥表現の検索)ということを行っている述べている。

表1 メタ言語の機能分類(西條 1999, p. 22)

機能分類	分類基準	用例
① 話題の提示	話題として取り上げること示す表現	<u>定義ですけれども問題分析に入りますが、</u>
②-1 他者発言焦点化	他者の発言に焦点をあて、話題展開のきっかけにする表現	<u>技術の導入とおっしゃったけど、</u>
②-2 自己発言焦点化	自分の専攻発言に焦点をあて、話題展開のきっかけにする表現	<u>前にも言ったように、技術の向上ということが、</u>
③-1 主張型総括	今言っていることに名前をつける表現	<u>以上のことから、夏時間を導入すべしと主張いたします。</u>
③-2 評価型総括	今言っていることについての評価を述べる表現	<u>…というような体験が、非常に大事なんじゃないかと思うのです。</u>
③-3 前触れ型総括	要旨を先に言い、後に説明が続くことを示す表現	<u>それを社会の規制というところへもってくるのは、誤りだとも思います。この立場で議論したいと思います。</u>
④ サブポイント提示	これから言うことの項目を示す表現	<u>四つの理由をあげていきます。</u>
⑤ 補正	自分が言及した、あるいは言及することに付言して、相手への配慮を示す表現	<u>…と言うと悪いけど、…と言うと逆のようにも聞こえますが、</u>
⑥ 表現の検索	適切な表現を探していることを示して、配慮を求める表現	<u>なんて言いますか、ちょっとまとまらないんですが、</u>
⑦ 宣言	これからすることを宣言する表現	<u>では、いくつか反駁いたします。いくつか質問いたします。</u>

また、日本語母語話者の議論の特徴として、反論による否定的印象を緩和するために、一つのターン内に否定的ポイントと肯定的ポイントを両方含めて発言する(Watanabe 2004)、意見を直接述べるのではなく、前置き表現を用いて意見をオブラートに包んで提示する(大塚 1999) ことなどが指摘されている。大塚(1999)は、討論場面における前置き表現について、ポライトネス(Brown & Levinson 1987)の観点から考察し、反対意見を述べる場合、前置き表現は相手の消極的面子の侵害度をできるだけ小さくしようとするために用いられるとしている。

なお、前置き表現はメタ言語表現(杉戸 1983 など)の一部ともされ、定義についてはまだ一致を見ないところであるが、陳(2007)がメタ言語表現を「前置き表現」と「非前置き表現」に分類しており、「メタ言語表現」はかなり広範囲の表現を含むことから、本稿ではより限定した意味を持つ「前置き表現」という表現を用いて論をすすめることとしたい。

2.2 日本語学習者の前置き表現に関する研究

前置き表現に関する習得研究については、次のようなものがある。

柏崎(1993)は、依頼・要求場面について調査し、学習者は母語話者より前置きの発話がやや少なかったとしている。山下・ファン(2001)は、母語話者と中国語を母語とする学習者の意見文を比較し、学習者は日本語母語話者よりも意見提示前の前置き表現が、数およびバリエーションともに少ないことを明らかにした。陳・古江(2008)は、日本語学習者の話し言葉コーパスである「KY コーパス」の分析を通して、前置き表現は上級や超上級になっても習得しにくいものであると指摘している。

また、議論の場においても、日本語学習者の言語行動の特徴として、他者の発言に遡及して自己の意見を述べるのが難しいこと(新井2001)や、他者の発言を認めてから反対意見を述べるといった意見の述べ方は、意識化はできても実際の使用は難しい(柳田2009)ことなどが指摘されている。新井(2001)や柳田(2009)が指摘している他者発言への遡及は西條(1999)の言う「②-1 他者発話焦点化」、他者発言の容認は「⑤補正」であり、意見提示前の前置き表現と言えるが、これまでの研究は、学習者はそれらの前置き表現の使用が母語話者の使用実態と異なる可能性があることを示しているといえる。

2.3 本研究の立場

これまでの研究によって、議論の場における母語話者の前置き表現の使用実態と、学習者の前置き表現の習得の一端が明らかになってきている。しかし、前置き表現に関する習得研究や、反論することによって相手に不快感を与える可能性の高い議論の場における前置き表現の習得や使用実態に関する研究は、あまり多くない。また、新井(2001)や柳田(2009)が指摘しているように、学習者は前置き表現の使用が母語話者の使用実態と異なる可能性があるが、提示された表現がどのように使用され、その使用状況がどのように変化していくかを調べた研究は、ほとんど行われていないようである。

しかし、反論することによって相手に不快感を与える可能性の高い議論の場において効果的に反対意見を述べるためには、相手の発話との関連を示しつつ対人関係に配慮した前置き表現の使用が不可欠であると考えられる。そこで本稿では、議論の場における中国人学習者の前置き表現の使用、特に「とてもいいと思いますが」、「確かに～ですが」などのように、反対意見を述べる際に共感・理解を表す形で相手に配慮を示し、相手発話との関連を明示的に示す前置き表現を「他者発言容認の前置き表現」とし、議論の経験を経て、その使用に変化が見られるかを分析、考察する。

3. 分析対象と分析方法

3.1 「他者発言容認の前置き表現」

本稿では、議論の場において他者に反対意見を述べる際に相手に共感・理解を表す形で相手に配慮を示し、相手発話との関連を明示的に示す前置き表現を「他者発言容認の前置き表現」とする。そしてそれを、次のように構成されるものと定義する。

{ 他者発言容認表現	他者発言引用部分	} + {逆接表現}
------------	----------	------------

(例) { 確かに

留学すると日本語が上達する

かもしれません } + { が }

他者発言引用部分は、西條（1999）の言う「②-1 他者発話焦点化」に当たる。焦点化の方法には、「そうかもしれませんが」、「A さんの言う通りですが」など、他者発言部分を「そう」や「言う通り」で形式的に置き換える「指示表現置き換え」と、他者発言を指示表現に置き換えるのではなく、引用したり要約したりして前置き表現に取り込む「他者発言引用・要約」の 2 種類がある。「指示表現置き換え」は次節表 2 の(1)、(2)のような例であり、「他者発言引用・要約」は、(3)、(4)、(5)のような例である。

このような前置き表現には、小宮（1991）も指摘しているように、反対意見を述べる前に「相手に共感を示す」「相手に理解を示す」などの点で、人間関係を円滑に保つ機能があり、引用を用いることで相手発話との関連を明示的に示し、議論の流れに自己発話を関係づける機能を持つといえる。

3.2 分析データ

中国人学習者の「他者発言容認の前置き表現」の使用状況を観察するために、以下に述べる方法で実施した討論会を分析した。討論会実施にあたり、学習者には討論会で使用する他の表現とともに、表 2 にあげた前置き表現をできるだけ使用して意見を述べるよう指示した。しかし、どの表現をどの程度の頻度で使用するかなどに関する指示は行わなかった。表 2 の表現はいずれも、『日本語口頭発表と討論の技術—コミュニケーション・スピーチ・ディベートのために』（p.109）から抜粋したものである⁽¹⁾。

表 2 学習者に提示した前置き表現

(1) そうかもしれませんが、…。	(2) おっしゃるとおり（言う通り）ですが、…。
(3) 確かに～が、しかし…。	(4) ～はいいとして、…。
(5) ～は理解できますが、…。	

* 「～」は他者発言引用部分、「…」は自分の意見を表す。

討論会は、中国の J 大学において日本語を専攻する大学 2 年生（以下 CJL: Chinese Japanese Learners）、21 名に対する会話授業で行った。CJL は、全員中国語母語話者で、

日本語レベルは2級相当である。討論会は全10回、実施期間は18週間である。会話授業は週2回で、1コマ90分であった。討論会は週2回の授業のうち、1回を使って行い、翌授業時にフィードバックを行った。フィードバックでは、全体の論の進め方や談話の展開、語彙・文法・発音等を主に扱い、前置き表現について特別に取り上げた回はなかった。

本授業における討論会は、「相手を不快にさせずに、自己の意見を説得力のある形で提示する必要のあるフォーマルな議論の場」と設定した。討論会はテーマについて肯定側と否定側に分かれ、意見を主張しあう形式で、立論－自由討論－最終立論で構成される。自由討論部分では、より自然な討論場面になるよう、ディベート（表3）のようにあらかじめターンを設定することはせず、司会者の下、討論者が自由に意見を述べ合うことができるようにしている（表4）。

討論会の討論者グループは、肯定側・否定側ともに5名、あるいは6名で構成される。討論者以外のメンバーは1名が司会者、それ以外は審査員として討論会に参加している。全討論会が同一メンバーで構成されているわけではないが、第1回から第10回の討論会にCJL全員が、討論者あるいは審査員、司会者として参加した。

表3 ディベートの手順樋口（1997）

肯定側立論	4分
否定側反対尋問	3分
否定側立論	4分
肯定側反対尋問	3分
否定側第1反駁	3分
肯定側第1反駁	3分
否定側最終反駁	3分
肯定側最終反駁	3分

表4 討論会の手順

司会－挨拶・テーマ紹介・ルールの確認	5分
肯定側代表－意見陳述	3分
否定側代表－意見陳述	3分
自由討論 ←分析対象	30分
（準備）	5分
肯定側代表－最終意見陳述	3分
否定側代表－最終意見陳述	3分
審査員との質疑、判定	10分

分析したデータは、全10回の討論会のうち、初期（第1回）、中期（第5回）、後期（第10回）の自由討論部分（各30分）である。それぞれのテーマは第1回「大学生のアルバイトの是非」、第5回「大学生のクラブ活動参加の是非」、第10回「大学時代に海外留学することの是非」であった²⁾。

3.3 分析方法

全10回の討論会のうち、初期（第1回）、中期（第5回）、後期（第10回）の自由討論部分（各30分）を文字化し³⁾、CJLに提示した前置き表現（表2）を中心に、他者発言容認の前置き表現を抽出した。

以下、自由討論部分で観察された他者発言容認の前置き表現について、出現数、表現形式、及び他者発言引用部分の観点から比較する。

4. 分析結果と考察

4.1 他者発言容認の前置き表現の出現数

他者発言容認の前置き表現の個人別出現数を比較したところ、初期は 10 人中 6 人、中期は 11 人中 7 人、後期は 10 人中 6 人が使用していた。また、初期、中期、後期の総出現数を比較したところ、初期は 12 回、中期は 13 回、後期は 14 回で、大きな差は見られず、発言者にも顕著な偏りは見られなかった。

これには、前置き表現をあらかじめ導入していたことと、その使用を指示していたことが影響したと考えられる。このことから、他者発言容認の前置き表現は、CJL の場合、表現が提示され、意識化されていると、安定して使用されうる表現であったと言える。

4.2 他者発言容認の前置き表現の使用表現形式の変化

次に、分析データ中の他者発言容認表現を観察したところ、次の①～⑦（下線部）の形式が観察された。以下、「肯＋数字」は肯定側討論者、「否＋数字」は否定側討論者、「司」は司会者を示す。

① そう

肯 1：自分は、ん、親、親のために、もっと勉強して、(目的) 一を、よくできるでしょう？

否 5：そうかもしれませんが、でも、今はアルバイトをするのは、確かに、危ない、危ない目をあうことが多いようです。

② 確かに＋そう

否 5：あ、それに外国語学院、外国語学院のあ、とくひょう [‘特徴’] を考えてほしいです。授業以外の時間だけは、十分です [‘不十分です’]。それに、私たちはもう、子どもじゃあるまいし、うん、自分の好きなものだ、ばかり、するのは、ちょっと、あん、贅沢じゃないですか？

司：肯 3 さんどうぞ。

肯 3：確かにそうかもしれませんが、でも、んー、肯 1 くん、肯 1 さん、代表、代表の発表に、発表、発表には、あー、私たちは興味があります。

③ 確かに＋言う通り

否 1：んー彼は、クラブ活動に入る、入る、んー心理協会に入る前に、ん、確かに、心理の、んー心理に興味を持っています。でも、んー、その協会に入って、うー何も、興味に、んー興味に関するものは何も、んー、得られません。だから、んー今は、んーもうその協会をやめました。

司：肯 5 さんどうぞ。

肯5：んー確かに否1さんのーん、い、い、言ったとおりでしょう。でもー、ん、ん、そ、
かつ、活動の数が少ないのは、んー、クラブ、クラブ、クラブ、のーんー、そ、組
織などの問題と思います。

④ 確かに＋引用・要約

否2：私は今、Y先生からH先生から、R先生からならっ、た日本語は生の日本語では
ありませんか。私たちは今、あんー、話せる、言葉は例えば、私たちは日本語を勉
強しているのです。これは生の日本語ではありませんか？

司：肯4さん。

肯4：確かに生の日本語です。でも、否2さん、こういう事実が知っていますか？

⑤ 確かに＋言う通り＋引用・要約

否2：時間は少しでもかかるでしょう。〔咳〕それに、クラブ活動に参加して、もし不愉
快になことなんて、あったら、気分ももっと一悪くなるかもしれませぬ。勉強のと
きそのことを考えながら、いらいらやすいです。それは多少勉強に、専門の勉強に
悪い影響を与えるでしょう。

(中略)

肯3：んー私は、私は、んー私はこう思います。んークラブ活動に参加しているとき、確
かに、あー否2さんの言う通り、んー悪いえい、あーじ、ぶ、あー自分の気分を悪
く、なるかもしれませぬが、でも、そのとき、ちゃん、ちょうど自分の能力を上げ
る時だと思います。

⑥ 確かに＋そう＋引用・要約

否5：んー例えば、日本語学部の学生の場合を、考えてください。あ、就職するとき、会
社の方は、あん聞かれる問題は何でしょうか。「あなたは1級の日本語能力試験に
パスしましたか？」、あん「どのくらい話せますか？」、「発音はどうですか？」
このような問題でしょう。どんなクラクラブ、クラブ活動に参加しましたか？何を
得ましたか？このような問題じゃありませんね。つまり、就職するとき、やはり専
攻のレベルが一番重要です。

司：肯5さんどうぞ。

肯5：ん、確かにんーそうかもしれませぬ。んーでもよい口を一さ、探せるのは、あるい
は、いい役に付けるのは、のに、のに対して、専門知識は最もたい、んだい、大事
ですが、んーでもんー、専門知識だけにん、限られる、ん訳ではありません。

⑦ 引用・要約

否 5 : 今、あー今の、今の、げ、現代、現代のげいじゅつ、あーげいじゅつから、あーげいじゅつ [‘技術’] から見ると、温室があるでしょう。南地方でも、北地方でも、あー同じ、同じ果物を食べることが、あー食べることとか、お、うえ、植えるこ、植える、こととか、できるでしょう。{はあ} あー、あん、日本語の勉強には、中国の大学には、いろいろな大学、あー大学が、あります。ん、あんーY、Y 先生や、H 先生などのような、あー日本語、日本語教育を、教える専門、専門先生も、たくさんいるでしょう。だから中国でも、あー、日本語をよく勉強するこ、ことが、きつとできるだろう、と思います。

(中略)

否 2 : 否 5 さんの話に付け加えたいんです。{咳} R 先生は大学時代に、日本に留学したことがありません。でも、今、R 先生は小さな、オレンジとは言えませんか？言えますか。

司 : はい、C グループの、肯 5 さん。

肯 5 : R 先生は成功しましたが、やはり、そんなに大きなオレンジではありません。

以上、使用された表現の出現数を表現形式別に集計した結果が表 5 である。

表 5 使用された表現別出現数比較

	① そう	② 確かに + そう	③ 確かに 通り + 言う	④ 確かに + 要 約	⑤ 確かに + 言う 通り + 要 約	⑥ 確かに + 要 約 + そう	⑦ 引用 ・ 要 約	計
初期	5 (33.3)	1 (8.3)	1 (8.3)	2 (25.0)	0 (0)	1 (8.3)	2 (16.7)	12(100)
中期	0 (0)	2 (15.4)	2 (15.4)	6 (46.2)	1 (7.7)	1 (7.7)	1 (7.7)	13(100)
後期	0 (0)	0 (0)	0 (0)	9 (64.3)	0 (0)	0 (0)	5 (35.7)	14(100)

* 数字は出現数、() 内は割合を表す。

実際に使用された表現を見てみると、事前に提示したいくつかの表現が組み合わされて使用されていたことがわかる。例えば、形式(1)「そうかもしれませんが」と形式(3)「確かに～が、しかし」が組み合わされた「確かにそうかもしれませんが」などの発話である。

また、導入した表現以外に、⑦引用・要約の発話例のような「相手発話の引用・要約+逆接表現」という形が使用されていたことがわかった。そのため、「相手発話の引用・要約+逆接表現」を「(6)引用・要約」とし、以下、導入した表現 5 形式と合わせて考察することとする。

討論会で観察された表現形式について、討論会前に導入した表現5形式(表2)に「(6)引用・要約」を追加し、表5の結果と対照したところ、表6のようになった(「確かにそうですが」などの複合形式の場合は「確かに」・「そう」別々に集計した)。

表6 使用された6形式の出現数の変化

	(1) そう	(2) 言う通り	(3) 確かに	(4) いいとして	(5) 理解できる	(6) 引用・要約
初期	7	1	5	0	0	2
中期	3	3	12	0	0	1
後期	0	0	9	0	0	5

表6から、導入した表現のうち、形式(4)「～はいいとして」、形式(5)「～は理解できますが」は、まったく使用されなかったことがわかる。また、形式(2)「言う通り」に関しては、中期で若干、使用が増えているものの、全体を通して少なかった。減少傾向にあったのは、形式(1)「そうかもしれませんが」で、増加傾向にあったのは形式(3)「確かに～が」、形式(6)「引用・要約+が」であった。

表5、表6の結果から、討論会初期は形式(1)「そうかもしれませんが…」が最も多かったが、中期・後期は形式(3)「確かに～が、しかし…」が最も多く使用されていたこと、回を経るにしたがって形式(1)が減少し、形式(3)と形式(6)に収斂されていくことが明らかになった。以下、これらの要因について考察する。

まず、形式(4)「～はいいとして」、形式(5)「～は理解できますが」がまったく使用されなかった要因として、日本語の文法上の制約が考えられる。形式(3)「確かに～が、しかし…」が、「確かにそうかもしれませんが」、「確かにAさんの言う通りですが」のように他者発言引用部分に形式(1)や形式(2)を挿入することが可能なのに対し、形式(4)、(5)の場合、「そうかもしれませんがいいとして」、「言う通りは理解できますが」などの複合形式を作ることができないという文法上の制約がある。さらに、引用や要約を形式(4)と形式(5)の他者発言引用部分に挿入する場合、挿入句を、形式名詞を使うなどして名詞化する必要がある、学習者の負担は大きくなる。そのために、形式(4)と形式(5)は使用が避けられたのではないだろうか。

次に、形式(3)の使用が一貫して使用されていた要因として、母語である中国語との対応が考えられる。形式(1)～(6)を中国語と対応させたものを表7に示す。

形式(3)の中国語訳「的确～」について、複数の中国語母語話者の内省として、中国語では相手の発言を受けて発話される場合に定型表現として使用されることの多い表現であるという回答を得た。検証の必要性はあるが、表6の結果からも、形式(3)が一貫して使用される傾向があることが示されており、この表現に関しては、母語が影響している可能性がある。

表 7 他者発言容認の前置き表現の日本語と中国語との対応⁽⁴⁾

	日本語	中国語
(1)	そうかもしれませんが…。	也许…
(2)	言う通りですが…。	正如你所说的、…
(3)	確かに～ですが、しかし…。	的确实是～、可是…
(4)	～はいいとして…。	就算～、可以的…
(5)	～は理解できますが…。	你说的～可以理解、但是…
(6)	～が…。	～、但是…

また、表 6 の結果から、回を経るにしたがって形式(1)「そうかもしれませんが」が減少し、形式(3)「確かに～が」と形式(6)「引用・要約+が」が増加する傾向にあったことが明らかになった。この要因については、次節と合わせて考察することとする。

4.3 他者発言引用部分の変化

本節では、他者発言引用部分の変化について分析し、形式(1)「そうかもしれませんが」が減少し、形式(3)「確かに～が」と形式(6)「引用・要約+が」が増加傾向にあった要因を考察する。

他者発言引用部分は、「そうかもしれませんが」、「A さんの言う通りですが」など、他者発言引用部分を「そう」や「言う通り」で定型的に置き換える「指示表現置き換え」と、他者発言を指示表現で簡単に置き換えるのではなく、引用したり要約したりして前置き表現に取り込む「他者発言引用・要約」の 2 種類がある。他者発言引用部分における「指示表現置き換え」と「他者発言引用・要約」には、以下のような発話が観察された（【 】は他者発言容認の前置き表現、□ は他者発言の引用部分である）。

(A) 指示表現置き換え

[テーマ：クラブ活動の是非]

否 5：んー例えば、日本語学部の学生の場合を、考えてください。あ、就職するとき、会社の方は、あん聞かれる問題は何でしょうか。「あなたは 1 級の日本語能力試験にパスしましたか?」、あん「どのくらい話せますか?」、「発音はどうですか?」このような問題でしょう。「どんなクラクラブ、クラブ活動に参加しましたか?」「何を得ましたか?」このような問題じゃありませんね。つまり、就職するとき、やはり専攻のレベルが一番重要です。

肯 5：ん、【確かにんーそうかもしれませんが。んーでも】よい口を一さ、探せるのは、あるいは、いい役に付けるのは、のに対して、専門知識は最もたい、んだい、大事ですが、んーでもんー、専門知識だけにん、限られる、訳ではありません。んー他の能力ももつと、他の能力も同じように、んー大切、だと思えます。

(B) 他者発言引用・要約

[テーマ：クラブ活動の是非]

否5：あんこのようなクラブに参加して、だまされたり、時間を無駄にしたりするより、専攻に関する本を読んだり、ドラマを見たり見たり、するのはもっと意味がある、じゃないですか？

肯4：んーまず、まず、あ、あんクラ、クラブに、参加するとき、もちろん、いいクラブに、あん自分の興味があるクラブに参加する、あん参加するー、はず、はずなんですね。あんそれに、【確かに本を読んだり、あテ、ドラマを見たりするのは、専門にいいですが】、あんしかし、クラブに参加する時間はただ、余暇の時間のーあん、す少ない一部分です。

引用部分の「指示表現置き換え」、「他者発言引用・要約」の両者の出現数を比較したところ、表8のようになった。

表8の結果から、回を経るにつれて指示表現置き換えが減り、他者発言引用・要約が増加したことがわかる。このことは、討論会初期の段階では、他者発言を「そう」や「言う通り」などに置き換える定型的な他者発言容認の前置き表現が多用されていたが、中期、後期と回を経るごとに、他者発言を取り込んだ、より焦点化された前置き表現の使用へと移行していったことを示している。

表8 他者発言引用部分の指示表現置き換えと他者発言引用・要約の変化

	他者発言引用部分		計
	指示表現置き換え	他者発言引用・要約	
初期	6 (50%)	6 (50%)	12 (100%)
中期	4 (30.8%)	9 (69.2%)	13 (100%)
後期	0 (0%)	14 (100%)	14 (100%)

このことから、CJLにとって、議論という発言の準備の時間が十分に取れない場において初期の段階から他者発言を即時に取り込むことは難しいが、議論の経験を経ることによって、徐々に即時に他者の発言を引用したり要約したりし、自己の発言に取り込んでいけるようになったと考えられる。

また、4.2 で見たように、使用される表現形式が形式(3)「確かに～が、…」に収斂されていったことから、表現形式の固定化がうかがえる。表現形式が形式(3)に収斂されていった要因は、他者発言容認の前置き表現が、定型的なものから他者発言を取り込んだものに移行するにつれ、学習者は表現形式を固定することで、表現形式を選択する負担を軽減させようとしたためではないだろうか。

5. 実践での活用の可能性と今後の課題

以上、反対意見を述べる際に共感・理解を表す形で相手に配慮を示し、相手発話との関連を明示的に示す「他者発言容認の前置き表現」について、CJLの使用実態の変化を分析した。今回は限られたデータながら、CJLの前置き表現が定型的なものからより相手の発話に焦点化されたものに変化する一方、CJLが複雑な形式の選択を避け、母語の影響が考えられる表現形式に使用が偏る傾向が明らかになった。

相手への配慮を必要とする度合いの高い議論の場において、前置き表現は円滑なコミュニケーションのために重要な役割を担っている。そのため、日本語教育において扱う必要性も高いと思われるが、本稿のデータから中国人日本語学習者の場合、「他者発言容認の前置き表現」は、事前に提示され、意識化された場合、初期の段階から使用される表現であることがわかった。一方で、実践において「他者発言容認の前置き表現」を取り上げる際には、以下の2点に留意する必要があることが示唆された。まず、他者発言を引用・要約して自己発言に取り込む前置き表現が、討論会初期には出現数が少なく、中期、後期と徐々に増加していったことから、このような前置き表現は表現を事前に提示するだけでは不十分で、ある程度の実験と実践的な使用環境が必要だといえよう。また、使用する表現が母語の影響を受けた表現形式に偏ったことから、使用する前置き表現のバリエーションについて継続的に意識させる必要もあるといえる。

本データの分析によって、中国人学習者の議論の場における「他者発言容認の前置き表現」の使用実態及び、使用の縦断的变化の一端が明らかになったが、今後はデータを拡充し、分析の妥当性を検証する必要がある。また、中国語における「他者発言容認の前置き表現」との対照と、中国人日本語学習者にとって使用しやすい表現と使用が難しい表現についての検討も今後の課題としたい。

注

- (1) 形式(1)は『日本語口頭発表と討論の技術』の「(4)反対を表明する」、形式(3)(4)(5)は「(6)いったん認めてから反論する」から抜粋した。形式(2)は「(4)賛成を表明する」の表現の一つに逆接表現「が」を筆者が加えてCJLに提示した。
- (2) テーマの選定にあたっては、CJLにとって身近であるもの、論拠となる資料の収集において実際に調査可能なものを中心に設定した。これは、アンケートやインタビューの方法を学習するためと、議論が文献やインターネットの資料からの直接引用に偏らないよう考慮したためである。
- (3) 文字化資料中の記号

、：短い間	。：文の終わり	?：上昇イントネーション
()：聞き取りにくかった発話	A ['B']：AはBの誤用	{ }：非言語行動
肯(数字)：肯定側討論者	否(数字)：否定側討論者	司：司会者

- (4) 中国語翻訳は日本語母語話者(中国語講師)に依頼し、2名の中国語母語話者(日本語レベルは上級)にチェックを依頼した。

参考文献

- 新井芳子(2001)「コミュニケーション能力の向上を目指してー討論会を通してその可能性を探るー」『世界の日本語教育』11, pp.1-16, 国際交流基金
- 大塚容子(1999)「テレビ討論における前置き表現ー「ポライトネス」の観点からー」『岐阜聖徳学園大学紀要』37, pp.117-131, 岐阜聖徳学園大学
- 柏崎秀子(1993)「話しかけ行動の談話分析ー依頼・要求表現の実際を中心にー」『日本語教育』79, pp.53-63, 日本語教育学会
- 国際交流基金(2007)『国際交流基金日本語教授法シリーズ第6巻「話すことを教える」』ひつじ書房
- 小宮修太郎(1991)「討論会場面の会話ストラテジー」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』6, pp.145-165, 筑波大学留学生センター
- 西條美紀(1999)『談話におけるメタ言語の役割』風間書院
- 杉戸清樹(1983)「待遇表現としての言語行動:注釈という視点」『日本語学』2-7, pp.32-42, 明治書院
- 杉戸清樹・塚田実知代(1991)「言語行動を説明する言語表現ー専門的文章の場合ー」『国立国語研究所報告集』12, pp.131-163, 国立国語研究所
- 陳臻渝(2007)「日本語会話における前置き表現」『言語文化研究 言語情報編』2, pp.99-115, 大阪府立大学
- 陳臻渝・古江尚美(2008)「中国語を母語とする日本語学習者による「前置き表現」の習得ーKY コーパスを利用してー」『言語文化学研究 言語情報編』3, pp.211-224, 大阪府立大学
- 東海大学留学生教育センター口頭発表教材研究会編(1995)『日本語口頭発表と討論の技術ーコミュニケーション・スピーチ・ディベートのために』東海大学出版会
- 樋口裕子(1997)「ディベートにおけるメタ言語表現の特徴 聞き手の理解という視点から」『日本語・日本文化研究』7, pp.225-234, 大阪外国語大学
- メイナード、K. 泉子(2005)『日本語教育の現場で使える談話表現ハンドブック』くろしお出版
- 山下みゆき・サウクエン・ファン(2001)「意見提示の opening marker としての前置き表現ー日本語母語話者と中国人学習者の比較ー」『2001年度日本語教育学会秋季大会予稿集』, pp.157-162, 日本語教育学会
- 柳田直美(2009)「アカデミックコミュニケーションスキル学習の場としての「討論会」ーブレ討論会が実際の討論会に与えた影響ー」『横浜国立大学留学生センター教育研究論集』16, pp.57-72, 横浜国立大学留学生センター

議論の場における「他者発言容認の前置き表現」使用の縦断的变化
— 中国人日本語学習者の場合 —

Brown, P. and Levinson, S. (1987) *Politeness: Some universals of language usage*. Cambridge University Press.

Watanabe, Suwako (2004) Conflict Management Strategies in Japanese Group Discussions
In Polly Szatrowski (eds.), *Hidden and Open Conflict in Japanese Conversational Interaction*, pp.65-92, Kurosio

(やなぎだ なおみ 国際教育センター講師)